

## 第23回教育委員会（臨）

開会日時 令和2年 11月 4日（水） 午前10時30分  
閉会日時 午前11時47分  
開会場所 赤塚第一中学校

### 出席者

教 育 長	中 川 修 一
委 員	高 野 佐 紀 子
委 員	青 木 義 男
委 員	松 澤 智 昭

### 出席事務局職員

事務局次長	藤 田 浩 二 郎	地域教育力担当部長	湯 本 隆
教育総務課長	近 藤 直 樹	学 務 課 長	星 野 邦 彦
指 導 室 長	門 野 吉 保	新しい学校づくり課長	渡 辺 五 樹
学校配置調整担当課長	浅 子 隆 史	地域教育力推進課長	諸 橋 達 昭
教育支援センター所長	平 沢 安 正	中央図書館長	大 橋 薫

### 署名委員

教育長

委 員

午前 10時 30分 開会

教 育 長 皆さん、おはようございます。本日は、3名の委員の出席を得ましたので、過半数の定足数を充足し会議は成立いたします。

それでは、ただいまから、令和2年第23回の教育委員会（臨時会）を開催いたします。

今回は、ここ赤塚第一中学校の体育館をお借りして、身近な教育委員会として会議を開催いたします。

板橋区教育委員会では、住民の皆様に対して開かれた教育行政を推進する観点から、「区民の皆様が身近に感じられる教育委員会の実現」に向けて、様々な取組を行っているところです。

その取組の一環としまして、本年度の1学期につきましては、新型コロナウイルスの感染拡大により、残念ながら中止とさせていただきましたが、例年、各学期に1回板橋区役所本校舎南館にございます教育支援センター研修室で、日中にお時間を取ることが難しい保護者の方向けに、開催時間を夜間に設定した開催や、本日のような地域の皆様や保護者、学校の関係者の皆様が傍聴しやすい、区内の各学校をお借りして、日中の時間で教育委員会を開催するなど、多くの方にご出席いただけるよう工夫をし、身近な教育委員会として開催しております。

さて、教育委員会は、地方公共団体が設置する行政委員会の1つでありまして、教育長と教育委員4名で構成する合議制の執行機関です。

申し遅れましたが、私は教育長の中川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、委員の紹介をいたします。

高野教育長職務代理者でございます。

高 野 委 員 高野です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 青木委員でございます。

青 木 委 員 青木です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 松澤教育委員でございます。

松 澤 委 員 松澤です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 以上のメンバーに、本日ご欠席の長沼委員を加え、定期的に会議を開催し、教育行政の運営に関する基本的な方針や重要な事項について、審議・決定しております。

また、私からご報告がございます。高野委員の任期が11月1日をもって満了になりましたが、10月27日の区議会本会議におきまして、高野委員は板橋区教育委員会委員としての再任の同意を得て、11月2日付で区長から教育委員に

任命されたことをご報告いたします。

高野委員、それではご挨拶をよろしくお願いいたします。

高野委員 ただいま、ご紹介いただきました高野です。11月1日をもって満了になり、また、2日から新たに3期目として教育委員を拝命いたしました。

今までと同様に、また今まで以上に頑張っまいりますので、皆様どうぞ、よろしくお願いいたします。

教 育 長 ありがとうございます。

さて、教育委員会では、1、学校その他の教育機関の管理。

2、学校の組織編制、教育課程、教科書その他の教材の取扱い。

3、教育職員の身分の取扱い。

4、社会教育、その他教育、学術及び文化に関する事務を行っております。

本日の会議では、来年度より本格的に始まっていくGIGAスクール構想につきまして、教育支援センター所長より、概要の説明をしていただいた後、「New Normalに生きる子どもたちへ～GIGAスクール構想実現に向けて～」をテーマとし、青木委員にご講演をいただき、各委員の意見交換を行っていきたいと思います。

本日の会議に同席している教育委員会の事務局の職員でございます。

藤田次長、湯本地域教育力担当部長、近藤教育総務課長、星野学務課長、門野指導室長、渡辺新しい学校づくり課長、浅子学校配置調整担当課長、諸橋地域教育力推進課長、平沢教育支援センター所長、大橋中央図書館長、以上10名でございます。

本日の議事録署名委員は、会議規則第29条により、松澤委員にお願いいたします。

また、本日は、大変多くの方に傍聴にお越しいただいておりますが、会議規則第30条により許可しましたので、お知らせいたします。

それでは、早速ですが、平沢教育支援センター所長より、GIGAスクール構想の概要説明をお願いいたします。

教育支援センター所長 教育支援センター所長の平沢と申します。

板橋区教育委員会では、教育ICTの推進について担当する部署として、教育支援センター内に教育ICT推進係という部署がございます。

その所管課ということで、今日はお時間をいただきまして、板橋区の進めるGIGAスクール構想の概要について、限られた時間ですが、ご説明をさせていただければと思っています。

スライドもご覧いただければと思います。

GIGAスクール構想は、4つの英語の頭文字を使って表しています。

文部科学省が、令和5年度までに公立小中学校、児童・生徒に一人一台のタブレット環境を実現するというところで始まりました。

しかし、このコロナ禍にあつて、そのG I G Aスクール構想は令和5年度までというのが、令和2年度中に、今年度中に一人一台のタブレット環境を整備するというので、大きな補助事業が進められました。

板橋区では、6月に約18億円の補正予算を組ませていただきまして、本年度中に高速のLAN工事、そして一人一台のタブレット環境の整備を進めていくことになりました。

一人一台のタブレット環境は、新しく、教育に大きな変化をもたらせます。これは、教育だけではなくて日本の行政全体でも、スライドでは黄色で表しましたが、クラウド・バイ・デフォルト、こういう考え方で進んでいきます。

クラウドを活用して、行政や、教育を様々進めていくという発想です。

実際に板橋区ではどのようなスケジュールでタブレットを導入していくかということですが、このタブレットを使うためにアカウント、一人一人の番号、を配布いたします。

そして、先月の末から一人一台、順次導入を進めています。10月の終わりには小学校1校、中学校2校に合わせて1,700台のタブレットの導入を終えたところです。今後、その全体約3万5,000台を超えるタブレットですが、順次導入をしていくこととなりますが、日本全国でこの構想が今動き出していますので、各メーカーも調達についてはかなり時間がかかるということがございます。

板橋区も6月の補正で、すぐに動いたのですが、最終的に全校へのタブレット配付は2月から3月、つまり今年度中というところで進めていくような状況になっています。

そして、実際に学校でタブレットを使うのは、インターネットへつなぐという調整をしなければいけませんので、その調整が1学期から夏休みいっぱいかかるのではないかと予想をしていますので、授業でタブレットを使う、インターネットを使って授業を進めるという環境が整うのは、来年の9月、2学期からと、今計画を進めているところでございます。

こちらが、導入予定の端末です。

重さが1.27kg、小学校1年生には少し重たいかもしれませんが。アメリカの国防総省の規格をクリアしていますので、85センチの高さから落しても壊れないという強度を持っています。全国のうち多くの自治体がこの機種を導入していくことになると考えています。

ログインは、今はIDを入れてパスワードを打つということを大体の方はやっていらっしゃると思うのですが、小学生には大変ですのでQRコードでログインできるようなシステムにしてあります。

先ほど、クラウド・バイ・デフォルトと言いましたが、OSが変わります。今、皆さんはお持ちだと思いますが、windowsというオペレーションシステムからChromeというシステムへ変更いたします。

そうしますと、今、我々が使っているワード、エクセル、今日使っているこのパワーポイントとは違うものが使われます。

ワードに代わるものとしてドキュメント、エクセルに代わるものとしてスプレ

ッドシート、パワーポイントに代わるものとしてスライド、ただこれは互換性がありますので、これまでのものがおおむね使用できる形になっています。

導入のアプリでございます。

これは、ミライシードというものを使う計画をしています。

実際にこれは、この場で見ていただいた方がよいかと思いますので、疑似体験をしていただこうと思います。今日、ミライシードの製造元であるベネッセの岡部さんにお越しいただいておりますので、限られた時間ですが、よろしくお願ひしたいと思います。

ベネッセコーポレーション 岡部氏

ただいま、ご紹介いただきましたベネッセコーポレーションの岡部と申します。本日は貴重な時間をいただきましてありがとうございます。

ただいま、所長からございましたが、導入ソフトでありますミライシードという学習ソフトについて10分程度でございますが、実際に少しご体験をいただければなと思っております。

こちらのミライシードというソフトですが、先ほどもございましたクラウドで動く学習ソフトとなっております、小学校、中学校向けの学習ソフトになります。

本日、限られた時間ですので、ドリルソフトについてご体験いただこうと思っております。

このドリルソフトですが、少し見づらいかもしれませんが、一番右側緑色のドリルパークというのがドリルソフトになります。

こちらに関しましては、ご家庭の端末からでもご利用いただくことができる内容となっておりますので、今後、学校の端末はもちろんなのですが、ご家庭でも使っていただくことができるというところが特徴になります。

本日、ご紹介をさせていただきませんが、オクリンク、ムーブノートという、上にある2つのアイコンに関しましては授業の中で、協働的な学びを行う上で、子どもたちがカードを作って、それを先生に提出したり、お互い交換し合ったりというような、そういった形で使っていただくことができるソフトとなっております。

では、委員の先生方も含めまして、実際に、このドリルソフト、ドリルパークというところを少し触っていただこうと思いますので、お手数ですが、先生方、お手元の端末で「ドリルパーク」というアイコンを押していただければと思います。

そうすると、「授業用と放課後用どちらにしますか」と出ますので、「授業用スタート」というのを押してください。そうしますと、こちらにドリルの一覧が出てくるかと思ひます。

まず、特徴といたしましては、こちらのドリル、ここの少し小さいですが今6年1組にログインしているのですが、「6年」と書いてあるところを押しますと、小学校1年生から中学校3年生までの内容に切り替えていただくことができるようになっております。

ですので、中学生であっても小学生の内容の振り返りをしたり、あるいは小学生であっても学び直しをしたり、あるいは上の学年に行ったりといったような、そういった使い方も可能になります。

では、今日は一旦6年生のままにさせていただきます、まず最初に漢字ドリルというのをご覧いただこうかなと思います。

赤色の「国語漢字ドリル」と書いてあるところ、こちらを一度押していただければと思います。そうしますと、板橋区内で使われている教科書会社さんを登録させていただいております、6年生で学習する单元ごとに、このように順番に並んでおります。

どの单元でも結構ですが、例えば「あの坂をのぼれば」という单元を押していただきますと、その单元で学習する漢字というのが並んでいるかと思えます。

どの漢字でも結構ですが、例えば私、「幼」という字を少し選択してみようと思えます。先生方も好きな漢字を押してみてください。

そうすると、「幼」という漢字をタブレット上で書き順でありましたり、字形を学習するということができるようになっております。

こちらは、右側のスペースのところになぞり書きをしていただくことができますのですが、少し欄が小さいと思えますので、この青色で、少し三角形が出っ張っているマークのところがあるかと思うのですが、ここを押していただくと、少し大きく拡大することができますので、こちらで少し一度なぞり書きをしてみてください。本当であれば、タッチペンのようななどがあると、より良いと思うのですが、本日は手書きでなぞり書きをしていただければと思います。

最初は、この赤色のガイド線が出ますので、こちらで書き順を確かめることができます。

書き終わりましたら、下段にある「答え合わせ」というボタンを押していただきますと、きれいに書いていけば花丸がつきます。

ここで、もしよろしければ少し字形を間違えたり、あるいは書き順を間違えたりということ、ぜひ一度試していただければと思います。そうしますと、ご覧のように実際、今回、私は「幼」という字の書き順を間違えたところではあるのですが、正しくどのように書けばいいのかといったようなところが自動的にアニメーションとして出てきます。

こういった、いわゆるエドテックと呼んだりしていますが、機械が自動的に学習を補助してくれる、再現してくれるというところを活用していただくことで、一人であっても漢字の正しい書き順や字形といったところを習得することができるというところが、こういった機械で学習を進めていただく1つの利点かなと思っております。

では、漢字ドリルはここまでにさせていただきます、右上にあります「終わる」というボタンを押していただき、「漢字ドリルを終わりますか」「はい」を押してください。

続いて、少し算数もご覧いただこうと思えますので、右上の「戻る」というのを一度押していただきますと、最初の画面まで戻っていただくことができるかと

思います。

では、続きまして、算数の「ベーシックドリル」というのを押してみてください。そうしますと、また先ほどの漢字ドリルと同様に、教科書で学習する順番に単元が構成されております。

例えば、一番上の対称な図形を押してみてください。

対称な図形の単元のドリルというのが幾つか入っております。

どの問題でも結構ですが、私は画面では左上の「線対称1」というのを押してみようと思います。

そうしますと、ご覧のような画面で問題に取り組んでいただくことができるようになります。

画面の中央部に「書く」というボタンがございまして、そちらを押していただきますと、実際に自分の考えを画面に書き込んだりするようなことも可能になります。

これによって、答えを選んでいって答え合わせとすると、一問一答形式で自動的に採点を行っていただくことができますので、これによって丸つけをする手間も省けたりするところや、その場で答えも分かるということが利点になっております。

少し進めていただきまして、少し画面の方を先生用の画面の方に切りかえさせていただこうと思います。

子どもたちが実際に授業の中で、あるいは家庭学習でドリルに取り組んでいる様子というのは、先生側のタブレットの方でリアルタイムにその進捗を確認していただくことができるようになっております。

例えば、今、出席番号1番のヒラタさんが、どういう問題に取り組んでいて、どういうことをしているのかといったようなところも、実際にリアルタイムで先生の方で確認していただくことができます。

例えば、出席番号6番の方は、今こういった問題に取り組んでいるのだなというようところが、リアルタイムに分かります。

ですので、先生方は、今まででしたらプリントを用意して、プリントを配って、そして例えば回収して、給食を食べながら先生方も丸つけなどをして、もしバツだった子がいたら、放課後に少し声をかけて指導したりといったような形で今までご指導されたかと思えます。ただ、このタブレットを使っただけならば、取り組んでいればリアルタイムに子どもたちの正誤情報というのが、どんどん先生方の手元に履歴として残っていきますので、その場で誤答している、間違えてしまっているというような生徒には声かけをしていただくというようなことが可能になるということになります。

ですので、先生方の働き方改革にもつながりますし、子どもたちにとってもその場で分からなかったところを先生に確認をできるというところで、非常に効率的、そして学習の内容の質も向上していくのではないかなと思っております。

本日は少し限られた時間ですので、以上にさせていただきたいと思っておりますが、これ以外にも色々な機能がございまして、今後板橋区様の方で、全校の小

中学校様で使っていただく予定ですので、先生方と一緒にこの使い方といったようなところを弊社としても、一緒にリンクさせていただきたいと思っております。短い時間でしたが、ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

教育支援センター所長      ありがとうございました。幾つか、今後導入していくソフトのご紹介の1つということで、ご説明いただきました。先ほど、来年の2学期から使用開始と申し上げましたが、実際に今年度中には各家庭に1台の環境になりますので、家庭にネット環境があるというご家庭ですと、4月からこのようなドリルの学習が家庭でもできるということになります。

また、これは他の区でも同じようなお願いをしているのですが、このタブレットの充電につきましてはご家庭でお願いをするということで、今、その準備を進めているところでございます。

以上でございます。

教 育 長      ありがとうございました。それでは、続きまして、平成25年4月より板橋区教育委員をお願いしております、青木委員よりご講演をいただきたいと思っております。青木委員、よろしくお願いいたします。

青 木 委 員      改めまして、皆さんおはようございます。

時間の関係がありますので、少し駆け足になるかと思いますが、今日のテーマ「New Normalに生きる子どもたちへ～GIGAスクール構想実現に向けて」ということで少しお話をさせていただきたいと思っております。

先ほど、平沢所長の方から申し上げましたGIGAスクール構想、これは実は1人1台という形になってはいますが、実際に比較的最近のデータで、今年のデータではないのですが、この赤ラインというのも大体目標値というところについています。目標値はグリーンですね、3人に1人という形にしたいのですが、今のところは平均値で5.4人に1人という形になっております。東京都が割と近いところまでいっているのですが、もう少しという感じになっている状況です。

では実際に少し世界と比べてどうなのですかというのがあって、下の図が、こちらがOECDの状況、上が日本になっています。

赤い棒が日本のものを見ているのですが、国語、数学、理科、いずれに関しても、やはりOECDと比べるとデジタル機器を利用するという時間がかなり少ないというデータのファクトが分かります。

文部科学省の方では、1人1台の端末というので何かができるかということをもとめた表がこちらになります。

それぞれ、学習の中には、教室による一斉学習、それから、それぞれのご家庭や学校別でやっている個別学習、あるいはグループ学習として少人数に別れてやる学習がございます。

これは、従来の形になりますが、これを同時進行という形になるというわけですが、なかなか教室ではデジタル黒板などを使って一生懸命合理化を図っている



ところですが、それぞれ若干の課題があるということがここに書いてあります。

これが1人1台の端末になりますと、学びの進化ということが進むのではないかと言われていて、子どもたち一人一人の、まさに今、ミライシードのご紹介のあった一人一人の反応を踏まえた双方向の授業が可能になるという話がございませぬ。

それから、個別学習に対しても、それぞれの進捗状況が分かりますので、学習履歴や、本当に弱いところをつかんで個別指導もできるという話になるかと思ひます

少人数のグループでは、我々の大学ではブレイクアウトルームというのを使っているのですが、少し時間を置いて、その中で一人一人の考えを意見交換しようというようなことが、この端末を使ってもできるようになるという、様々な利点があつて、活用していこうという形になっているところでございます。

それで、この図は非常に見えづらい形なのですが、下の図のイメージを少し捉えてください。

このGIGAスクール構想を実現するに当たっては、1人1台に最適なコンテンツの提供とありますが、実は端末を配っただけでは終わりではございませぬ。

先ほど、平沢所長からのお話しもあつたのですが、クラウドを利用する色々な前処理が必要です。例えば、個人情報の保護ですとか、それからセキュリティーの関係で、今回、クラウドを受けてG3というのを使いますから、グーグルの関係のOSを使うという形になりますが、そのときに個人認証が入ります。

個人認証をしないとクラウド利用というのはできないものですから、その一人一人のIDとパスワードがあるわけですが、これも配って、それでそのクラウドの中に入るときに、必ず個人認証が必要になりますので、認証用のサーバーと言われるものが必要になる。それを置かないといけぬし、それに対して一気に何万人とかいう人たちがアクセスすると、あまり能力の高いものでないと、そこでフリーズしたりします。

ですので、この辺の環境も整える必要があります。ちなみに、私のいる大学の学部だけで1万人いますので、実際に今年の4月からオンライン授業を始めたときに、この個人認証のサーバーがフリーズした経験が5月の連休明けにございました。ですので、こういったところの整備が非常に重要になってきます。

さらには、ご自宅で勉強するとき、やはりネットの環境が必要になります。

今、5Gというのが期待されているわけですが、やはりご家庭によっては、なかなかそういった最新のWi-Fiが入れられないということになりますと、その辺のサポートもしなければいけぬということになります。

これは、我々の大学でも、やはり今年の4月からオンライン授業を行うに当たっては、ご家庭に1台モバイルルーターを買える支援ですとか、実際の物を配ったりして、何とかやり切ったというところがございませぬ。

ですので、やはり子どもたち一人一人の家庭に設置するようになると、やはりそれなりに時間と環境整備に対して期間が必要になるということが言えると思ひます。

少し、上の方に書いてあるものを大きく拡大しました。めざすべき次世代の学校や教育の現場では、特に赤線の部分が重要ですが、これは先ほどお話があったとおり、個別に最適で効果的な学びや支援を行うということができるようになるかと思います。また、いわゆるプロジェクト型の学習を通じて創造性を育むという、1回では終わらないものを学びの計画、インストラクショナルデザインというのですが、学びの計画をきちんと立てて、段階を通して学んでいくということが、こういった1人1台端末の中では少し自由が広がるということ、なぜこういったことが必要か、そのほかにもあるのですよね、働き方改革の関係などでもこういった文化を活用できることとなります。

成長過程というところで、少し皆さんも十分に意識されていることだと思うのですが、我々教育サイドにいるものを意識しているもので、このような考え方があります。実際に色々なことに自信を持って、自主的に色々な物事に関わっていく、精神的土台ラインという、実はこれは段階を踏まないところまで行けないという図でございます。

まず、やはり保・幼・小・中という中で、小さい頃からある程度、コミュニティーに所属して、例えば自分の気の合う仲間と出会って、いわゆる友達をつくるというところから始めないといけないのです。

コミュニティーの中で、やはり友達同士でお互いに頼ったり、頼られたりということをしてながら、僕も、私も、友達のために、あるいは世の中のために、何かの役に立っているのだなという感覚を持ってもらうというのが、次のステップです。

さらには、その中で、友達に褒められたりとか、親御さんに褒められたりとかいう段階を経て、自己肯定感というものができて、自分が学校の中で、あるいは社会の中で、生きていくためのプラス思考というのが生まれてくると思います。

これの積み重ねによって、ようやく精神的土台ラインができると言われていて、その先まで行った子たちが、いわゆるスポーツや文化、芸術でもそうであるように、挑戦的意欲をもって、さらにはその積み重ねで自信を持ち、挑戦し、成果を出していくという段階になろうかと思います。

ここを学校、地域、それからご家庭で育てていくというのが、特に小学校までに大事なところなのかなと感じているところです。

これを、現代の社会に置き換えて、いよいよ題目のNew Normalというところで、少しテーマを絞っていきたいと思います。では、New Normalというのは、どういうふうに考えていくのかという話ですが、実は今、Society 5.0という話があります。いきなり聞いて5.0ということは、1や2とか3とかあるのだねということを皆様が思われるのですが、人間が社会を築いていく、今まで文明を築いてきた中で、Society 1.0というのが狩猟社会になります。

一応、グループにまとまって狩りをするというところから始まります。

2番目が畑を耕すということを知って、作物を育てるという文化、農耕社会でございます。

そして、次は工業社会が始まりました。これより近代というところになるかと思いますが、少しこれも私の大学の話ですが、私のいる学部が立ち上がったのが1920年代、工業社会というところで、いわゆるここから戦争もありましたが、この後、高度成長期を迎えて、さらには日本でバブルといったようなところを迎えた時期がこうなるかと思います。

その後、情報社会というのが生まれまして、これがSociety 4.0になります。今、Society 4.0の真ただ中ということで、まさにここでGIGAスクールといったようなものが入ってきている状況になりますが、ここで実は新型コロナウイルス感染症というもので、大きな転換期になったというのが今年の話でございます。

ここでは、特にオンライン関係では高等教育の分野からデジタル化の加速が進みました。

今、大学の中に学生を入れるのもようやくできてきた段階で、小中学校に比べますと、なかなか開けない状態が進んだ中で、オンラインを進めざるを得なかったという状況がございます。

これは、逆の発想をしますと、デジタル化が加速したという言い方ができるかと思いますが、この加速して、実際には社会実験をするまでには様々な実験が必要でございます。

実験をしていったこの半年の中で色々なことが分かってきました。

課題もたくさん抽出できました。

という中で、我々が例えば大学、高等教育の中で培った課題や知見を、小中高といったところのデジタル化というところに何か貢献できるかなと考えている状況ではあります。

それで、来るべきSociety 5.0、超スマート社会に向けてということで、これはイギリスのリンダ・グラットン教授が提示したテクノロジーに関する10の注目すべき要因になる。これから、未来に向けてどのようなことが世の中の変革になってくるかを10の要因として書いたものでございます。

上の3つ、これは既に実現していると私は感じるものです。

地球上の至るところでクラウドの利用が可能になっているというのは、まだつながっている人口というのは、50というところまではいっているのか微妙ですが、今衛星を通じて色々な国、発展途上国にもインターネットがつながる状況になってございます。

そして、現在進行中なのが赤で書いてあるところです。

経済生産性の向上持続でチームワークが重要になります。ソーシャルな参加が活発になります。それから知識のデジタル化が進んで、リモートでの参加ができます。これは、まさに今回の新型コロナウイルス感染症のところで在宅勤務、これがリモートというところになるかと思いますが。

それから、実際に起こっていることでグローバルのメガ企業、例えばグーグルなど、そのような企業がメガ企業になりますでしょうか。

あるいは、今、クラウドファンディングを含めて、ミニ企業家が台頭すること

が実際に世の中に起こってきている。こういったものが現在進行中であります。そして、バーチャルな空間で働き、アバターが当たり前になる。これはこの後、少し説明させていただきますが、これも現在進行中だと思います。

そして、未来には、いよいよAIなどが進化して、「人工知能アシスタント」が普及したり、テクノロジー自体が、ロボットというのが分かりやすいと思いますが、人間の労働者にとって代わる時代がやってくるのではないかと予測されている状況です。

その予兆ということで、New Normalの到来という中を時代の変革で少しご説明したいと思います。

今、多くの方たちは、今この日本は資本主義社会という社会科で習ったような社会であると考えている方も多いと思いますが、実際には少しずつ変わり始めている。Society 4.0になったときに、実際に皆様の身の回りに出てきている幾つかの事情があらうかと思っています。

今、ネットを通じて、もうテレビをあまり見ない子どもたちが出てきている、ネットの方が楽しいと言っている子どもたち、それから子どもたちの中でYoutuberになりたいという、人気の職業、将来になりたい職業の1位だったというようなことが、テレビとかメディアで言われているかと思いますが、Youtuberですとか、Tiktokerですとか、Instagramerですとか、初めて聞く方もいらっしゃると思います。インフルエンサーですとか、クラウドファンディングなどというのは、どちらかというところ、この価値基準で言うと資本主義社会の実用的な価値、たくさん物を作ってたくさん物を売る、そしてビジネスを展開するという世界から、どちらかというところ、これいいね、よく言う「いいね」ですね、という内面的な価値へどんどんシフトしているという状況が伺えます。

これが1つです。それから、先ほど申し上げましたソーシャルな活動。社会的な価値というのを認められていて、注目されるようになってきて、例えばソーシャルビジネス、コミュニティビジネス、サブスクと言われるあたりが、こういう社会的な価値の中で、ビジネスとして成立するような社会、これらを価値主義社会という呼び方をするようになってきているという話がこれです。

これが、Society 4.0、情報社会の中で、少しずつ社会の変革という中で出てきたことだというふうに言われているものです。

それと同時に、クラウドというものが使えるようになりましたので、クラウドの上で共創によるオープンイノベーションとかリバースイノベーション。

リバースイノベーションは、初めて聞くお話かと思うのですが、先進国で培った技術やテクノロジー、その他を発展途上国にうまく転用する、そして発展途上国の中で、その地域、環境に合わせたイノベーションを展開するというものが、リバースイノベーションというふうに使われていて、日本からも、例えば東南アジア、それからアフリカ、こういったところにどんどん展開していったら、リバースイノベーションをしている企業ですとか、あるいは若い起業家がいったりするというお話もあります。

それから、これも一部で言われているバウンダリースパナーという話、今、いわゆる専門分野という概念を少しずつ崩してきているという考え方があります。

物を社会科学的に、あるいは人文科学的に捉えまじょうと、我々理系でも言われる時代になりました。

それから、オバマ大統領がSTEM（STEM）、スティーム（STEAM）といったような形で、文系であっても、理系であっても、ある程度共通科目で学ぶことが必要な文理融合という、色々な言われ方をしています。

この中では、多様な価値観を受入れて、所属する領域、専門分野にとどまらずに、外部世界と弱いつながりを広げられるということが重要な時代になってきたと言われています。

大学教育の中でも、一人一人異なる学びの形態や、多様性を理解すること、これは国を超えてです。これが大事という、それからこの3番目というのが一番重要で、パラレルの世界、パラレルワールドというのが、これは映画の世界やSFの世界ではございません。実際のネットの世界の中で、創出コンテンツがビジネスモデルになる時代になりました。先ほど申し上げたYoutuberやTiktoker、Instagramerで、実際にお金をかなり高額なお金をもうけている方もいらっしゃいます。

その人たちは別に、もちろん自分がネットの中に登場するというのもありますが、アバターと言われるような自分の変わり身というようなゲームのキャラクターのようなものをつくって、そこで実際にYoutuberもVTuberと言われるものですね。そういったようなもので、実際にビジネスを展開している人たちも出てくるということで、実際に自分が部屋の中で、単にコンピューターを打っているだけのようですが、それが1つのビジネスにつながる、要するにネット、サイバー空間で1つの人格が生まれ、そこではその人格が非常に成功しているというモデルも、実は出てきている社会になりました。

この辺がNew Normalの世代の人たちには大きなキーワードになっているのではないかと思います。

今、それを踏まえて、超スマート社会と言われる来たるべき社会には、こういうキーワードが出てきます。サイバーフィジカルシステムと言われるものです。

簡単に短い言葉で言いますと、現実世界で膨大な観測データ、ビックデータなどと言われているものです。観測データなどの情報をサイバー空間で分析、予測、発信することで、社会システムの効率化ですとか、新産業、全く新しいネットを使った産業などの創出をめざすシステム自体を指しているわけです。

大学の中でも、こういうテーマを基に、データサイエンスの分野ですとか、AIの分野の人たちが、これを研究テーマにするような時代になってきたということがございます。

大分難しい話に展開しているかと思えます。では、これを教育にどう展開するかという中で、今、プロジェクトベースラーニングと先ほど申しました。

プロジェクト型の教育という中には、このようなプログラミング教育というものも多く取り入れられるようになりました。例えば、成増ヶ丘小学校で世界大会に

行ったFirst LEGO League、これもロボットプログラミングで、このような卓球台の大きさぐらいのところで、様々なロボットを自分たちで作って、それをプログラミングして、この中でのミッションをクリアする、まさにゲームのような感覚ですが、実際にその中で学ぶ、様々なことが子どもたちの身について達成感や自己肯定感につながるという形のものであります。同じような大会で、小中高生が国内の大会で宇宙エレベーターロボット競技会、今年もバーチャルで12月6日に開催されるもの、それから、これは高校生なのですが、同じ区内の豊山女子高校がF1 in schoolsといって、これは世界から58か国から参加があり、2018年のシンガポールで大会が行われて、これは何かと言いますと、コンピューターを使って皆さんの世代で言うとミニ四駆のようなボディで、形はF1なのでF1の形のもをコンピューター上のソフトで作って、それをネット上からデータを送って、機械加工機で実際にものを作り、それにタイヤなどをつけて、それを空気の圧力で直線距離20mをスパンと飛ばすという競技会なのですが、単にタイムを競うだけなのですが、作り方によって非常にスピードが変わるというもので、それをこの女子高生のチームが参加して行って、世界のチームと一緒に戦ったという話あります。

結局、このような大会に参加して良かったと思う点は、世界大会に行った子たちが口をそろえて言うことです。「色々な国の子たちと話ができた」「色々な国の子たちと友達になれた」これが彼ら、彼女にとって多様性の理解だけではなくて、非常に大きく色々なものを自分の中でも理解を一步進める大きな道具立てになっていると思います。これをプロジェクト型で進めていくということは、この板橋区の中でも、もっともっと進めていただきたいなと思っているところでございます。

これを、小中高から含めて、こういった教育で成功した子たちであります。もちろん、スポーツ、文化、芸術の分野でも、いわゆる成功してスポーツ選手になりますとか、音楽家、タレントになりますとか色々あるかと思えます。

そういった子たちは、やはり若いときから目標を持って、どんどんその分野に研鑽していったということが言えるかと思えます。

大学に進学した子たちの中にも、やはり将来何かをやりたいというところで、そのプロジェクトに取り組んで、例えば世界と協働しながら衛星を打ち上げるとか、ロボットの方でやはり世界の大会で優勝するというような子たちが出てきておりますので、教育の中でもこういったものというのは、やはり目標を持って、それに向かって、実際に大会というかスポーツでも吹奏楽部、コンペで同じだと思っておりますが、その日までに自分たちで仕上げるということをしていないといけないですね。これが、プロジェクトマネジメントと我々は呼んでいるものですが、このプロジェクトマネジメントがいかに大事かということを彼らは体で覚えるということなんです。

会社に出れば、当然納期というのがあって、そこで何かを仕上げるというのは皆さんが一番よくご存じだと思います。それを、やはり体で体験するというのが、非常に彼らにとって社会性を養うという上で重要なのです。

ここで少し、せっかくの機会ですので、宇宙開発の動画を見ていただきたいと思います。

(ビデオ動画)

ありがとうございました。大学でも宇宙の衛星が開発できるという、2000年から始まったプロジェクトをご紹介させていただきました。

今、4機打ち上げられて2022年にはベトナム航空宇宙センターと協働で、また1機打ち上がるということが決まっています。これが、学生たちが主体でやっていることで、十分こういうことが私たちにもできるということです。

これらを踏まえて、まとめに入りますが、新たな価値創出に不可欠な要素、これをGIGAスクール構想でつくりたいという話になります。

これは例えですが、例えば星が輝きを放つというイメージを持ってください。実際に惑星などは地球も含めて丸いものですが、光を放つとこのような星の形になるということで、5つの要素というのを挙げさせていただきました。

時間の関係もありますが、未知なるものへの「冒険心」、専門分野外への「好奇心」、変化に対応する「柔軟性」、逆境もポジティブに捉える「楽観性」、粘り強く続ける「持続性」、こういったものが、この丸い球体が光を放つために必要なものという例えでございます。

もう1つ、学びのプロセスというのを同じくくりでやらせていただきました。

私たちのところでは、CST×DREAMという標語を掲げております。

このDREAMなのですが、STEAMと何が違うのか、リードが違うわけですね。このDREAMを5つなぞってみたのが、Instructional Designの中で、まずAから始まるというのは我々の考えたものです。

Aは「Art」です。Aは創造への試行錯誤、これはサイバー空間でできる。

それから次は、「Mathematics」、数学です。分析からの気づきです。これもサイバー空間、ネットでできることなのですね。

次は、「Design」、モノづくり・コトづくりは、これは現実社会で体験、経験によって身につけていく。

次に「Realization」。これはまさに具現化という話ですから、現実社会で試行錯誤して失敗を積み重ねて、繰り返し諦めずにやったということで実現するもの。

最後、「Engineering」、やはりこの社会の中で本当に便利なのか、使えるのか、みんなが幸福になれるのか、こういうものを判断して、世の中に送り出していくというのが学びのプロセス、プロジェクトのプロセスだと考えてきて、これを教育の中でどのように展開できるかという、実際にこのAとかMはサイバー空間でできる、合理化が図れる、あるいはこのDにも、今、様々なソフトウェアを使ってネットでできるものが増えてきているので、この辺を合理的に使うことで、New Normalが牽引する未来社会が到来します。

それが、いわゆる我々がめざしている平和で持続可能な社会、超スマート社会

になるかは、我々大人たちの責任でもありますので、学校、地域の皆様と一緒に、子どもたちの「知の翼」を大きく育て、そのような世界を実現したいと思います。

長時間になりました。ご清聴、どうもありがとうございました。

教 育 長 青木委員、ありがとうございました。それでは、各委員からの所感、あるいは質疑等を伺おうと思います。

それでは、高野委員、よろしいでしょうか。

高 野 委 員 私は、最初のみらいシードを体験させていただいて、できるのかなと心配だったのですが、実際説明どおりに自分で体験をしてみて、とても分かりやすく、子どもたちもこれならば、すぐに使いこなせるようになるし、またそれを繰り返すことで、どんどん上達していくのではないかとという安心感を覚えました。

あと、青木委員のお話の中で、私はプロジェクトマネジメントという言葉が印象に残りました。実際に、今子どもたちも部活や、学級の活動など、そういうところで目標を持って、それをどういうふうに進めていくかということ、しっかりとやっていると思います。それがお話しの中であった成増ヶ丘小学校や日大豊山女子高等学校など、世界につながっていく目標を身近なところで持っているのだということ、また大学生の宇宙開発の衛星を上げようというような目標も、身近にあるのだということを知ってもらって、そういう夢にチャレンジしてほしいなと思いました。

教 育 長 ありがとうございます。

みらいシードというソフトの教育をご覧になっていただいたら分かると思いますが、要は子どもたちが間違えると、AIがどこを間違えているのかということを知ってくれたり、あるいはその間違いを指摘して、また次の問題を出したりという機能があると思うのですが、平沢所長、もう少しみらいシードの使い方、どのようなことができるのかを教えてくださいませんか。

教育支援センター所長 基本的には、GIGAスクール構想、教育ICTの教育は「個別最適化」がキーワードになっています。

その子どもたちにとって、最も負担がかからないように、最適な学習環境が提供できるということが大きな利点になっていると思っています。

これまで、いわゆる教科書の副教材として、様々買っていたものが、今回、これで総合的な1つのソフトとして供給できることになります。

これは、教科書に準拠した順で編成がされるようになっていますので、色々な教科書会社のどの教科書を採択しても、それに対応できることになります。また、家庭での学習に向けても、グーグルのクラスルーム・フォームを使えば、先生とのやり取りも併せてできますので、これまでの宿題のやり方や、家での予習復習のやり方とは随分違った形になると思います。



教 育 長 そうすると、今後タブレットは、当然のように自宅にも持ち帰って、家庭学習の1つのツールとして活用もできるということでしょうか。

教育支援センター所長 今、その方向で様々な調整を進めているところでございます。

教 育 長 ありがとうございます。

それから、もう1つ、成増ヶ丘小学校がファーストレゴリーグという世界大会に出場するという、公立の小学校では初めて、小学校の子どもたちだけがチームを組んで挑戦したということの評価されて出てきたわけです。このFLLについて、青木委員、内容をもう少し具体的にご説明いただけますか。

青 木 委 員 ありがとうございます。FLLなのですが、ファーストレゴリーグ、これは毎年、大体8月の下旬ぐらいにその年々でテーマが与えられます。

そのテーマが、まさに超スマート社会をめざしたようなテーマ、環境汚染にどう対応するのかなど社会課題を解決しましょうというテーマが多いのです。そのテーマに向かって、幾つかクリアする課題が、先ほどの卓球台ぐらいの中で幾つかのミッションとして定義されます。子どもたちは、それをクリアするための、まさにゲームではないのですが、ロボットのようなものを作ってプログラミングをし、それを規定の時間内でクリアしていくという、まさにゲーム感覚でやる部分と、自分たちはどういうコンセプトでこのロボットを作り、実際にどういうチームで、誰が何をやるという役割分担などを全てプレゼンテーションする部分があります。ですから、ポスターを作ったり、世界大会に行くと言語でプレゼンテーションをしたりする中で、自分たちをアピールする、自分たちのやったプロセスをどううまく説明するかということ、学んでいくことができます。上位に残る子たちが、自分を説明するのが非常に上手になります。

その辺が、特に日本の子どもたちが学びの中でできなかった部分ではないかと思っていて、非常に効果が大いではないかと思っております。

教 育 長 ありがとうございます。

I C T、あるいはG I G Aスクールも「個別最適化」が非常にアピールされていて、一人一人の学びの大きさということもあるのですが、実はもう1つ協働的という、いわゆる仲間意識をもって学んでいく、そういった「チーム」というものの強みも実はあるのです。個別最適化というのは一人一人に応じた学びであるとともに、仲間と協働的な学びというところがあり、その1つの方法論として、FLLが出てきているのかと思っています。

松澤委員、どうですか。

松 澤 委 員 今、お話を聞いておまして、やはりコロナウイルスの状況もある中ではありますが、未来に向けて、新しい時代が教育の分野でも訪れるのではないかと感じ

ました。

青木委員の最後の動画を見て、感じる事なのですが、子どもたちもそうですし、大人もそうですが、大きな失敗というものを恐れて、色々なことにチャレンジできないということが多々あると思うのです。ですが、大きな失敗をしたときに、その中で、1つでも成果が出たものということは必ずあると思います。

マイナスのことを思って先に進めないことがたくさんある中で、その小さな成功を必ずどこかで見ている人がいて、その成功に期待して次のチャンスを与えてくれる、そういうことが多々あります。世の中に出ると、スモールビジネスの世界と青木委員もおっしゃっていましたが、今、小さな起業家でも十年後、二十年後にすごく大きく飛躍している会社というのは、多分これからの十年でたくさんあると思います。そういうようなチャンスが、一番ある時代が今なのではないかと思っておりますので、今、中学校、小学校、そして、今まだ二十歳、二十代前後の方たちには、これから大きな失敗があるかもしれませんが、そういう失敗を恐れずに、1つでも成果を出せるように、先ほどの動画ではないですが、自分たちがチームをつくったり、色々な形で、成果を上げられる努力をしたりする、そういうことが今後、これからの時代に必要なのではないかと思えます。

そのために、今GIGAスクールのお話もありましたが、必要なスキルなど、これからデジタル化の時代で必ず必要になってくる分野を、中学校、小学校から学べるということは、子どもたちにとってはこれからの時代を生きていく上で非常にプラスになるのではないかなと私は思っておりますので、これから期待していきたいです。

以上です。

教 育 長      ありがとうございました。

GIGAスクール構想という言葉が先んじていましたが、実は私も今、青木委員のお話を伺いながら、何か分かったような、分からないようなというのが正直なところです。非常に難しいことなのかなと思いつつも、我々もそうなのですが、明らかに子どもたちは、これからそういった社会、あるいはそういった世界に入っていくときに、一体どういう力が必要なのかということを考える必要があるのかなと思っております。

つまり、私たちが生きてきた昭和、あるいは平成という時代で必要とされたものと、これからの令和で認められている、あるいはこれからの未来に求められている力の方向性というのは、明らかに異なってくるのかなと思うのですが、このあたりについて、青木委員、最後のところにもお話があったのですが、少し触れていただいてよろしいですか。

青 木 委 員      お話を随分させていただいたのですが、今回のテーマになっている現実空間とサイバー空間というのがありますが、皆さんもそうですが、子どもたちも本当に多様です。スポーツの得意な子、文化芸術が得意な子、それから勉強が得意な子、色々だと思えます。そんな中で、今出てきているのは、僕は、私は、何の取り柄

もないとそう思ってしまう子供たちがいます。そういう子供たちを一人でも救いたいという中から、やはりあなたが活躍できる場面はあるということ、どこかで教師やご家庭や地域の人が見つけてあげることだと思います。

とにかく、自己肯定感というのを与えてあげることによって、多様な場面で活躍ができる世界になってきていると思います。これは現実社会に限ったことではありません。

だから、そこら辺のチャンスを子どもたちが気づいて、自分の力で歩み出してくれるように後押しするのが、私たち大人の役割で、その可能性と環境を持っているのが今の子どもたちだと思っています。

ですから、iC Sなどのような多くの人の力をお借りして、子どもたち一人一人が1人もこぼれないという世界をつくっていくというのが、少子化の中でとても大事なことだと想像して、その可能性があるということだけを、皆様にご理解いただければと思っております。

教 育 長      ありがとうございます。

そういう意味では、新しい学習指導要領というものが十年に一度ぐらいのペースでできてくるのですが、実は今年度は、このコロナの影響もあって、少しその辺が薄くなってしまっています。

今年から小学校が新しい学習指導要領に沿って3つの大きな資質、能力ということをやっています。1つは、生きて働く知識及び技能の修得、2つ目は、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等の規制、そして3つ目が学びを人生の社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等といったようなところがあるのですが、これが来年は中学校、そして再来年高等学校という形で、今までのような学校種によってというよりも、縦にこの3つの力、資質、能力を育てていくようになったわけです。このG I G Aスクール構想によって、そういった力を育てていくということなのですが、私はこのG I G Aスクール構想で、1人1台の端末が入ると、何かがらっと学校教育が変わってしまうかのような、そういう捉え方をされることに対して、少し首をかしげてしまいます。

門野室長、学校教育にG I G Aスクール構想が入った際の教員の立ち位置や、授業というのはどういう変化を遂げていくのかというあたりについて、少しお願いできますか。

指 導 室 長      指導室長の門野と申します。

今、教育長のお話にありましたとおり、タブレットを配布していったときに考えないといけないのは、例えば今、子どもたちは辞書を持って授業に参加している。あるいは小学校のときに二十年ぐらい前に入った「電卓を持ってきていいのですか」というような議論があったり、「電子辞典は学校の中で活用していいのか」という議論があったり、それ以上に大きなインパクトがあるかと思うのですが、タブレットを活用して授業をしていくという新しいツールが1つ増えて、鉛筆や消しゴムやノートと同じように、タブレットというものができた。ただ、鉛

筆や消しゴムと大きく違うところは、学校でも使うし、家庭でも使うし、大きな変化はあまり子どもたちにはうれしくないかもしれないのですが、旅行先に行っても宿題できるよという環境が整ってしまう。それが世界標準であるということは、子どもたちがこれから長い世の中、まさに未来を背負っていく上では、活用できて当たり前の世界の中で日本、世界中が1つになっていくという意味合いでは、当然必要になってくる。ただ、子どもはやはり義務教育になるので、小学校、中学校の段階でのタブレットの活用と考えると、青木委員がおっしゃっていた大学は高等教育ですので、そこに行くまでの1つの大きな、最初の段階、まさに小学校1年生のときに何を学んで、どう活用していくのかということ、まさにそういうことなのかと思っています。ですから、情報をどう活用するのかということや、モラルとかマナー、そういったこともしっかりと教えていかなければならないと思いますし、何よりも、先ほどタブレットの画面に出ていたと思うのですが、あれは読み取れないと使えないのですよね。

私たち大人は、何となく経験値で使っているののでできると思うのですが、そうではないのですよね。あれは、どう読み取って、どう活用していくかということ子どもたちにしっかりと教えてあげることが、義務教育にはすごく大事なことかなとは思っています。

あともう1つは、やはり体験ですよね。実体験。これもすごく大事だと思います。

デジタルの時代になればなるほど、特に義務教育の子どもたちは実体験が必要です。感動を伴うような体験というものをしっかりと味わわせていくことが、やはり学校教育の中の大きな使命の1つではないかとは考えています。

以上です。

教 育 長      ありがとうございます。

子どもたちは、いわゆるデジタルICTに触れていないわけではなくて、スマートフォンをはじめ、むしろ生活環境はICTに囲まれていると思います。

しかしながら、その多くが日本の子どもたちの場合はゲームとか動画、あるいはSNSなど、少し厳しい言葉を言うと、時間的な浪費であったり、承認要求を加熱させるものであったり、あるいは自己満足を図るようなもので、その視野や世界認識の広がりには、なかなかつながりにくいというような状況があるのではないかと思っています。

これは、やはり大人のいわゆる消費社会、会社企業側のそういった買わせようという作戦なのでしょうが、そういうプライベートなデジタル環境ではなくて、子どもたちの日常生活では触れる機会が少ない、知的で文化的で、いわゆる公的なデジタル環境を学校において保障して、そういったデジタルメディアとの、より成熟したつき合い、つまり個人の満足ということよりも、その知的な満足度が得られるようなつき合い方を学校において学ぶことが重要ではないかなと感じております。

今日ご欠席の長沼委員からも、一言メッセージが入っておりますので、教育総

務課長から代読させていただきたいと思います。

教育総務課長

ご紹介させていただきます。

G I G Aスクール構想への期待。

いよいよ1人1台の時代が来ると思うとワクワクします。

子どもの頃に見た特撮ヒーロー番組が描く時代は、まさにこの時代のことでしたから、昭和の高度成長期に生まれた私は「ついに未来が来たのだ」と思うのです。これからの社会を生きていく板橋区の児童・生徒が描く未来はどのようなもののでしょうか。

G I G Aスクールが実現されると、教科学習の授業も劇的に変わっていくと思いますが、個人的には教科以外の教育活動がどのような変容を遂げるのかに興味があります。

例えば、学級活動の学級会において、意見を出し合って合意形成をする際、どのような活用の仕方をするのでしょうか。自分の考えが瞬時に教室前のボードに表示され、賛成が多い意見が可視化されるということができるようになるのでしょうか。そうすると話合いのスタイルやコミュニケーションのあり方も変わってくるのかもしれない。児童・生徒がクラウド上にあるファイルを活用できるのですから、例えば学級会の経過や結果のファイルを共同で作成することも可能になります。また、G o o g l e M e e tを使えば、児童会や生徒会の話合い活動もオンラインでできますので、これまでの制約にこだわらない活動方法が可能になるかもしれません。

ぜひ、特別活動の研究部会の先生方で、学級活動や児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事での活用方法について協議を進めてほしいものです。中学校の部活動も同様です。動画を使うなど、短い時間でも効果を上げる練習方法などが開発できると思います。

また、教科・領域別の研究も進むと思いますが、それとは別に次のような分類で推進を考えることができます。第一に授業のように児童生徒と教員との関係で用いる場合。第二に児童・生徒が家庭も含めて一人で活用する場合。第三に家庭と学校との連携で活用できる場合です。最後の活用は、本日お集まりの保護者の皆様にも関係してきますので、着目してほしい点です。学校の授業と家庭学習とが、より効果的に結びつけば学力向上が期待できますし、ご家庭へのお知らせなどが紙でなくなれば環境に優しい社会の実現やSDG sにも寄与できます。

一般に新しいことを始める場合には、最初は色々な課題が生じるものですが、それらをご家庭の皆様と学校の先生方で共有しながら乗り越えて「どこの区よりも効果的に活用している」と言えるような状態になるように、一緒に取り組んでいきましょう。

以上でございます。

教 育 長

ありがとうございました。

今日、この後、ご出席の皆様方と、このあたりを含めてお話をさせていた

だきたいと思うのですが、最後に少し私の方から、「New Normal＝新しい日常」という言葉、これも冒頭に教育支援センター所長から話がありましたが、実はGIGAスクール構想は令和5年度を目途にということだったのが、このコロナによって、一気に3年前倒しになってきています。これは大変なことで、実はコロナが起こったことによって、様々な変化が起きています。

それは、学校現場においても今まで当たり前に行われてきたことが、実は一体何のために行っているのか、あるいは何のためにそれを行う必要があるのかという、そもそもの質的な変化、あるいは質というものを求められる、今までは「今までやってきたから」あるいは「量を増やせばいい」といったところから、一体「何のために」という目的が問われる、そういう時代になってきています。

このGIGAスクール構想も、1人1台のタブレットを使うことが目的になっては困るのです。主体的、対話的で深い学びといった、子どもたちにとって真に必要な学び方の目的を達成するための1つの手段、ツールであるというところを認識しながら進めていく必要があるということを、今説明を聞きながら、あるいは皆様方のお話を聞きながら、感じたところがございます。

それでは、以上をもちまして、本日の教育委員会を終了いたします。

ありがとうございました。

午前 11時 47分 開会